

新潮文庫

笑　　う　　月

安部公房著



新潮社

わら　　つき
笑　　う　　月

新潮文庫

あ - 4 - 18



昭和五十九年七月二十五日発行
昭和六十二年二月十日八刷

著　　者　　安あ　部べ　公こう　房ぼ

発　行　者　　佐　藤　亮　一

発　行　所　　株式　会社　新　潮　社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・憲專堂製本株式会社

© Kôbô Abe 1975　Printed in Japan

新 潮 文 庫

笑 う 月

目 次

睡眠誘導術	九
笑　　う　　月	七
たとえば、タブの研究	三
発想の種子	三一
藤野君のこと	三九
蓄　　音　　機	五七
ワラゲン考	四
アリスのカメラ	七〇
シャボン玉の皮	七七
ある芸術家の肖像	八六

阿波環状線の夢……………九五

案内人……………一〇三

自己犠牲……………一〇〇

空飛ぶ男……………一八

鞆……………二九

公然の秘密……………一三七

秘密会……………一四六

插画 安部真知

笑

う

月

睡眠誘導術

眠られぬ夜のために、とっておきの睡眠誘導術を伝授するでしょう。

まず、アメリカの西部劇に出てくる、なるべくありふれた場面を思い浮べていた
だきたい。駅馬車の襲撃に都合がよさそうな、けわしい峡谷つきの大平原が望まし
い。もつともなぜ西部劇でなければならないのか、理由はよく分らない。あるいは
鬚物まげものの時代劇でも同じことかもしれないが、経験上、やはり西部劇がいいようだ。
筋も場面も、まことに類型的で、想像するのにほとんど努力を要しないせいかもしれ
ない。

さて、その大平原を横切っている一本の白い道。やがて道は高い断崖だんがいにはばまれ、

深い割目に吸い込まれる。危険だが廻り道はできないという、おあつらえの場所である。君は今インディアンだ。その断崖の上の、何処か適当な岩陰を見付けて、じっと身をひそめよう。天頂には、浜辺に打上げられたクラゲのように、ふるえつつけている白い太陽。はためく風は、透明な大天幕だ。発育の悪い、赤ちゃけた繁み。砂色に焦げた、薄い草むら。お望みならば、ウェスタンの伴奏を流してもいい。

やがて一羽のコンドルが、なにかの危険を告げるように、天空高くまい上る。つづいて遠く道ぞいに、一本の帯状になってたなびく砂ぼこり。例の制服に身をかためた騎兵の一隊である。あせってはいけない。連中が全員、谷間に入り込んでしまふまで待て。狭い谷間の中では、一列縦隊をとるしかなく、急な後退も散開も不可能だ。そこを見はからって、一人々々ねらい撃ちにすればいい。君は名だたる弓の名手、ねらった的を外す気づかいはないのである。

さあ、矢をはなて。空気を引裂く弦の音。矢は見えないが、命中の手ごたえはあった。胸をおさえ、ネツカチーフをひきむしりながら、映画の場面そっくりに落馬

していく白人の兵士。そら次の矢だ。こんどの奴は帽子を飛ばした。つんのめって、馬の首を抱きかかえる。ゆっくり見きわめてから、三本目をつがえよう。敵の数に不足はないし、矢の手持もたつぷりだ。

むろん条件によつて違うが、調子さえよければ、四、五人目から効果が現れることがある。二十人を超えることはめつたにない。急速で、しかも実になめらかな眠りへの移行。弓をつがえた腕から突然力が抜け、あたりの光景が見るみる凍つて、色あせる。そのまま君は深い眠りに落ちていく。苦しまぎれに、千から数字を逆に数えてみたり、無理に通い馴れた道順をなぞつてみたりする時のような、あの不眠との闘いからくる、苛^{いらだ}立^たたしい疲労感などまったく認められない。一見殺伐にみえる、岩陰からの狙^{そげ}撃^ぎごつこが、これほどの鎮静作用を持っているとは意外に思われるかもしれないが、事実なのだから仕方ないだろう。殺人と、殺人ごつことは、互に相反する別々の事柄なのかもしれないのだ。とすると、たとえば最近のモデル・ガン取締の方針など、当局の意図に反して、むしろ大衆の狂暴化を促進することに

なりはしまいか。

それはともかく、不都合なことに、このせつかくの安眠術が今のぼくにはまったく役立ってくれないのである。ある時、つがえた矢の先端が、くるりとU字型に曲ってこちらを向いてしまったのだ。致命的だった。じつを言うと、ぼくには先端恐怖症の傾向がある。そばで編物をされると、編棒の先が眼にささりそうで我慢できなくなるし、電車で隣に掛けた客の本の角が耐えられず、つい席を立てしてしまうことさえあるほどだ。一度、矢の先が気になりだすと、もういけない。いくら新しい矢につがえなおしてみても、つがえなおした端から、くるりと曲ってしまうのだ。鎮静どころか、ますます苛立ち、眠りは遠ざかる。

そこで弓をライフルに替えてみた。鋼鉄のチューブは、さすがに矢よりは丈夫だった。替えてしばらくは、なんとか持ちこたえてくれた。しかし、状況は同じことで、銃身になんとか歪力わいりよくがかかり、もう以前のように安定してくれない。催眠効果と、銃身を曲げまいとする努力がせめぎ合い、倒す相手の数も次第に増えてい

く。そしてある日、その銃身も、ぐにやりと曲つてこちらを向いてしまったのである。

とりあえずは先端恐怖症を治すのが先決だ。だが、神経科の医者 of 助言によれば、なによりもまずよく眠ることだと言う。それはそうだろう。よく眠るためには、よく眠ればいいに決まっている。何か先端のない、球型の武器でもないものだろうか。

だが、本当にやっかいなのは、不眠よりもむしろ夢からなかなか覚められない時かもしれない。寝覚めの悪さは、寝付きの悪さ以上に、骨身にこたえるものだ。たとえば、恐いものに追い掛けられる夢をみた時、あわやと思うと、たいてい自然に覚めてくれるものだが、それがなかなか覚めてくれなかったりする。一度など、こんな経験さえあった。

その時ぼくは旅先で、ホテルのロビーで誰かを待っていた。電話の呼び出しがあり、客が都合で一時間遅れると告げてきた。ぼくは部屋に戻って、服のまま横にな

り、例の睡眠誘導術でうたた寝をすることにした。そして夢をみた。

夢の中で、ぼくは気味の悪い化物に追いかけられていた。年に一、二度は現れてぼくを悩ます、常連の化物だ。頭にいちめん、小指の先ほどのカサブタが群生している。カサブタは、干魚の鱗うろこのようなもので覆われ、先端に薄い毛が残っている。どんな危害を加えられるのか、はつきり分っているわけではなかったが、とにかく逃げずにはいられない。化物は薄笑いを浮べて追いかけてくる。ぼくは必死に逃げまどう。どこか混こみいった裏町だった。道は狭く、すぐ袋小路に突き当たってしまう。塀へいを乗り越え、垣根をくぐり、他人の家を通り抜け、犬に吠えつかれながら逃げまどう。そのうち、例によって、夢かもしれないことに思い当る。走りながら、手の甲を抓つかつてみる。やはり夢だ、まるつきり痛みを感じない。しかしまだ安心できないので、もう一度抓りなおしてみる。つまんだ手の甲の皮を、思いきり引き伸してみる。皮はゴムのように、二十センチ以上も伸び、痛くも痒かゆくもない。夢だと確信はあったが、化物に対する恐怖がそれで薄らいでくれたわけではなかった。ただ、

普通は、なんとなく緊張がほぐれて、自動的に覚めてくれるものなのだ。しかしその日は違った。夢だと分っているのに、いつこう覚めてくれそうな気配がない。ぼくはまごつき、きばつてみたり、力んでみたり、濡れてちぢんだ海水パンツを脱ぐような努力を重ね、それでも効果がないので、思い切つて化物につかまつてしまおうかとも考える。だが、それでも覚めなかったらと思うと、ぞつとして、やはり決心をつけかねた。そこでいよいよ、最後の手段に訴えることにしたわけだ。

誰でも覚えのあることだろうが、墜落の夢はかならず覚醒かくせいにつながっている。夢なのだから、死ぬ気遣いはない。どこか高い所から、飛び降りればいい。勇氣はいるが、ほんの一瞬のことだし、あの化物につかまるよりはましだろう。橋があつた。下は水の涸かれた砂利の河原。細い流れに足をひたして子供たちが遊んでいる。振向くと、化物はもう橋のたもとにせまっていた。もう一度手の甲を抓つてみてから、固く眼を閉じ、全身にはずみをつけて身をおどらせる。

どうしたことか、それでもまだ、覚めてくれないのだ。河原に落ちたぼくは、ゴ